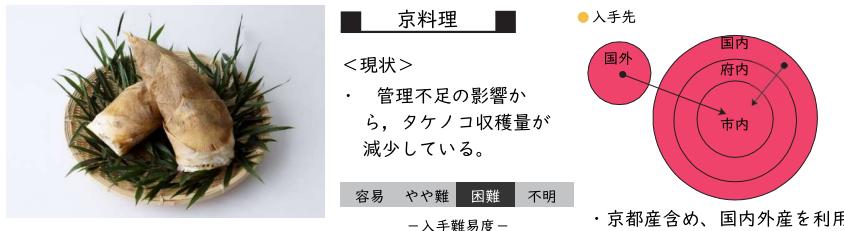


## 「京都らしさ」との関わり



## 生物資源の利用と調達状況の例



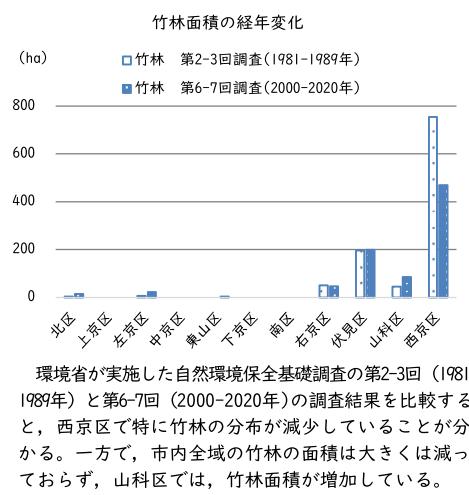
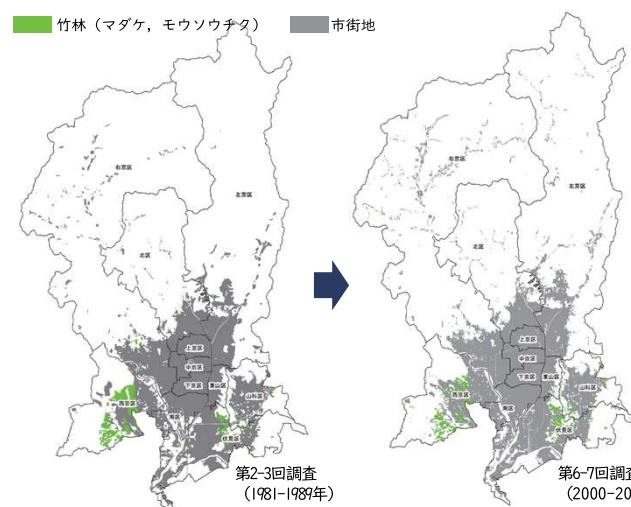
## タケノコの分布と生態

京都市はケッペンの気候区分において温帯性区分に位置しており、この区分ではモウソウチクは気温が10°Cを超すと成長を開始して12°Cで地上に頭を出し、マダケは16~24°Cで地上に頭を出す。食用として代表的なタケノコは、モウソウチク、ホテイチク、ハチク、マダケなどがあるが、京たけのこのほとんどがモウソウチクである。

タケノコが伸びる速度は、モウソウチクでは1日に1.2mに達することもある。モウソウチクでは、竹材採取を目的にする場合の生育密度は1ha当たり6,000~7,000本に調整するが、タケノコ採取畠では春季にタケノコの発生を促すために地表温度が上がりやすくなるよう、地表面まで日光が十分に届くように、竹の生育密度を低く抑える必要があり、3,500~4,000本/haとしている。発生本数と管理を考えると、竹材採取地からタケノコ採取畠に転換するには、1ha当たり3,000本ほど伐採する必要がある。

以上より、少なくとも100m<sup>2</sup>当たり30本近く伐竹する必要が生じるため、放置竹林を整備し、タケノコ採取畠として維持するためにかかる労力の負担は大きいと考えられる。

## 分布（資源）量の推移



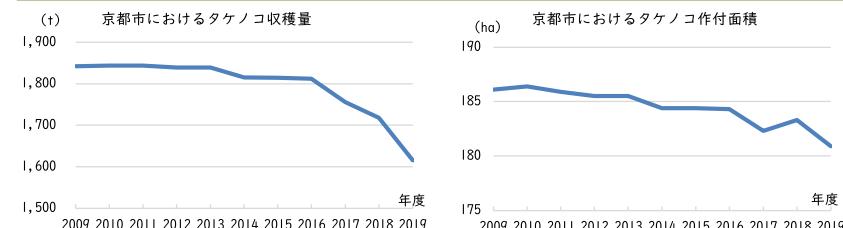
環境省が実施した自然環境保全基礎調査の第2-3回（1981-1989年）と第6-7回（2000-2020年）の調査結果を比較すると、西京区で特に竹林の分布が減少していることが分かる。一方で、市内全域の竹林の面積は大きくなっている。

## 減少理由と課題の整理

- |           |  |
|-----------|--|
| 気象害       | 枯竹などは台風などの気象害の影響を受けやすい。                |
| 獣害        | イノシシ等獣害被害の増加。                          |
| 担い手（管理）不足 | 竹林の維持管理不足から枯竹、倒竹が多く発生し、新しいタケノコの発生が少ない。 |
| 外来種       |  |
| 都市化       | 都市化の影響から分布面積が減少している。                   |



## タケノコ収穫量・作付面積の推移



出典: 農林統計(京都市)を使用し、作成。

京都市におけるタケノコの収穫量及び作付面積は、ともに減少している。

市内の竹林面積は大幅には減っていないことから、市内における放置竹林が増加しているものと推察される。

## 「京都らしさ」としての位置付け

指標種: タケノコ  
ハビタット: 竹林



- ① 京料理等との関わりが深く、京都らしい食文化の伝承していくには必要な生物資源。
- ② タケノコは竹とともに、「京都らしさ」を支える生物資源。
- ③ 竹林というハビタットで保全再生を図りながら、竹林管理ができる範囲で実施していくことが考えられる。

